

2019年1月29日

2018年全日本スプリントの運営状況の問題とその背景について

日本オリエンテーリング協会
会長 山西 哲郎

報告に先立ち、全日本スプリント大会にご参加いただいた競技者の皆様に、改めてお礼申し上げます。本大会は主管者による準備の遅れのため、「全日本大会」の冠付与の取り消しの検討が、JOA 内において準備段階で行われました。しかし、日本一を競う場を競技者へ提供することが国内組織の責務であるとの判断から、JOA の役員・委員を実行委員会に加えることで開催に踏み切りました。精一杯の努力をしたつもりでしたが、結果として競技者の皆様の期待に十分に答えることができませんでした。この点について深くお詫びいたします。

大会開催後に、JOA の主催大会の運営体制への懸念も参加者の方から頂きました。この報告は、本大会において生じた問題点や明らかになった課題を確認するとともに、その原因を直接的なものだけでなく、間接的、構造的な側面から検討し、再発防止と質の高い大会の提供に向けての方策を提示するものです。オリエンテーリングを愛好する皆さんの期待に応えることは競技を統括する団体の責務ですが、同時に限られた資源の中で今後も大会を無理なく提供し続ける環境を構築することも競技統括団体の責務です。本報告書は、JOA の大会運営上の問題を克服するだけでなく、今後の持続可能なオリエンテーリング発展に向けての前向きな議論の土台となることを目的としています。

なお、本報告は【1】で本大会の課題・問題点を整理し、【2】運営上の問題発生の原因と背景要因を探り、【3】今後に向けた方策の骨子を記載しています。なお、事実関係については、全て固有名詞は外し、アルファベットまたは大会における役職名を記載してあります。

【1】全日本スプリント大会の課題・問題点

当日の課題・問題点

本大会の当日の運営に関して、以下の事案が競技責任者より報告されています。この詳細については、付録の競技責任者のレポートに記してあります。

1. スタートチャイマーの動作不良とそれによって早い時刻にスタートした選手のタイムロスがあった。
2. ME 予選で D 選手がスタートの1秒前にスタート枠を離れたことで失格となり、提訴に対しても失格の裁定を受けた。

3. ME/WE 予選中の WEB サイトによるライブ配信で、遅いスタート時刻の選手が事前にどちらのヒートかを知りうる状況であった。
4. 障害物エリアを観戦エリアから見ることができたため、E クラス予選のスタートの遅い選手に有利になる可能性があった。
5. E クラス決勝の終盤のコントロール設置位置を、一運営者が間違えて移動した
6. 0.1 秒単位によるフィニッシュ時刻計測による一時的な順位決定の誤りがあった
7. 岐阜県協会の幟を立てて、人工特徴物コントロールを作ったにも関わらず、特殊記号の内容を周知しなかった。

開催までの経緯と問題点

1. 2018 年の 8 月、公認大会の本申請が遅れ、進捗状況の報告を主管者である YMOE 社に求めたが、開催準備遅れへの対応についての実質的な回答は得られなかった。このため公認不可が有力な選択肢となった。また、(10 月初旬) 開催地である岐阜県協会が責任を持ってないことから主催者にはなれない旨の連絡があった。
2. 一方で、地元渉外には問題がなく、地図の確保が可能であるという回答が得られたため、全日本スプリントに向けて準備している選手への影響を考え、「JOA が主催（運営）に責任を持つ形で実施」の提案が競技委員会担当の G 理事からなされた。
3. 他の代替大会についての意見もあったが、スプリント運営の経験のない組織であったことから、代替することは難しいという判断となった。
4. 10 月中旬に業務執行理事が状況を検討し、全日本としての開催可能という原案を持って理事に賛否を諮り、理事の賛同により JOA が主要な役員を供出する形で実施することとなった（賛成 9，反対 2）。

【2】運営上の問題発生の原因と背景要因

1. 直接的要因

本大会で発生した課題や問題点は、以下の直接的原因によって発生したと考えられます。

- ① 準備作業の実施漏れ
- ② 運営役員間の役割分担の不明確さ
- ③ 規則等への思い込み
- ④ 判断ミスとそれを防ぐチェック機構が働かなかったこと

大会で通常実施される準備作業が、実施されませんでした（たとえばスタートチャイマーの動作確認）。また、②役員間の分担の不明確さによって、こうした問題点が直前まで気付かれることなく、大会を迎えてしまいました。1 秒単位で成績を出すところを 0.1 秒単位で成績を出すという計測のミスについては、国際規則に依拠した単純な思い込みでした。

ライブ配信やコントロール位置の移動については判断ミスですが、その背後には判断ミスが実質的な問題に拡大しないためのチェック機構が十分に働かなかったことが挙げられます。

さらに、本大会では、以下のように（背景要因）これらのミスを誘発し、かつダメージを未然に防ぐ方策が十分ではありませんでした。

2. 背景要因

- ①短期間での準備と杜撰なスケジュール管理
- ②運営マニュアルの未作成によって、役員間の共通認識が不十分であるとともに、課題の事前対応が不足したこと

ミスの背景には上記の二つの大きな要因があると考えられます。公認大会申請の遅れに表れたように、主管者・主催者ともにスケジュール管理が十分ではありませんでした。それが短期での準備と相俟って、相乗的に問題を拡大させました。また、運営要領（いわゆるマニュアル）が未作成で役員間の共通認識が不足したり、発生した運営上の課題に対して、相互確認により事前に対応することができませんでした。

3. 構造的要因

1) 主催者（JOA）のガバナンスの要因

- ①主催者としての主催大会開催の統制不足
- ②主催大会についての長期的プランと財源確保の不十分さ
- ③全日本大会を主管できる組織の不足
- ④質維持 vs 実施上の制約のジレンマ

2) 主管者（YMOE）の要因

- ①スタッフ間の協働体制の不十分さ
- ②関係主体との協力関係の不十分さ
- ③スケジュール管理の不十分さ
- ④（結果的に）過重な負荷を生んだサービス精神

主催者である JOA と主管者である YMOE の上記のような構造的な問題が、大会で問題が露呈する背後にあったと考えられます。まず、主催者である JOA は、伝統的に開催されてきた全日本大会（ロング）を含めて、主催事業である全日本大会に対して十分な統制力を発揮できていませんでした。このことは、全日本大会が基本的には会員（各都道府県協会）の主管により自律的に行われてきたことを踏まえたものですが、結果として主管者が抱える要因に対処することができませんでした。

オリエンテーリングではイベントアドバイザー（コントローラ）制度によって、競技の質担保が行われてきましたが、イベントアドバイザー（コントローラ）は主催者からは独立して任務を果たすことや、直接運営に手を出さないことが俯瞰的視点を持つために必要なことから、実務遂行に問題が生じた時、それに対して有効なガバナンス方法にはなりませんでした。

全日本（ロング）については、ここ数年はJOA内に実行委員会を設置し、持続に向けてプロデューサー採用などの対応をしてきましたが、長期的な開催プランを確立するまでは至っていません。長期プランが立てられなくなった背景には、競技者レベルの向上や2005年世界選手権開催以来、地図の質への欲求は強くなったことで、大会開催の負担感が増加したことも挙げられます。これにより、それまで開催の主体であった会員（都道府県協会）の主管・主催離れが生じ、全日本大会を主管しようとする組織が不足しています。競技者数の限られているオリエンテーリングでは、大会運営の大部分は参加費収入に支えられ、その額には限度があります。ボランティアベースの運営で質を維持することは多くの困難を伴います。

YMOEは、前年の全日本スプリントのWE定員割れ事態を打開すべく、集客につながるメニューを豊富に企画し、計時スタッフやコースに関する検討を競技責任者と十分に行ったものの、準備期間の短さからスタッフ間の打ち合わせに問題が発生したり、スタッフ間や関係主体との連携を十分に構築することができませんでした。

【3】今後に向けて

全日本スプリント大会で発生した問題点の一つ一つは、運営にあたったスタッフによって発生したものです。しかし、その遠因や構造的原因を検討することが、今後の再発防止につながります。その背後には日本のオリエンテーリング界が抱えている構造的原因もあります。それに対して、JOAが有効な対応をこれまで立案できなかったことも、構造的原因の一つと考えられます。

その構造的性質から、即時的に対応することは難しいものですが、以下に指摘する枠組みで、課題に一つ一つ取り組んでいく所存です。まず、競技形式上、旧来のオリエンテーリングの枠組みでは十分対応しきれないスプリント競技については、「スプリント競技検討委員会（仮称）」設置し、政策的なレベルも含めて今後の具体策を検討します。また、スプリント以外の競技・組織運営については検討WG/委員会を策定し、来年度総会（2019年6月）までに対処策に関する一定の結論を出します。その過程で理事による討議や審議（2/23、5月）とともに、パブリックコメントを実施します。なお、上記の問題意識についてもこの検討過程で再度検討の対象とします。

1. 長期的課題（3年～が視野）

①プロフェッショナルとボランティアが協働できる体制づくり

②地域運営組織の育成

③運営者と競技者の相互理解

長期的に全日本大会を開催する組織基盤を維持し、相互大会運営というオリエンテーリングの文化を維持するために上記のような視点を中核とし、組織の在り方、相互の関係性、意志決定の仕組みなどを確立します。これらの具体的方策については、上記 WG での検討課題とします。中期的な対応に示すアスリート委員会の設置、あるいは競技規則の周知や啓発等を通して、運営者と競技者の相互理解を進めます。

2. 中期的対応（概ね1～3年）

①主催大会の在り方についてのステークホルダー間での熟議

②主催大会のガバナンスの適正化

③アスリート委員会（と選手会）の設置

長期的対応の方向性を踏まえ、主催大会のガバナンスを適正化すると同時に、主催大会の在り方を、JOA、会員（都道府県組織）、クラブ、競技者などのステークホルダーとの相互理解を深め、目指すべき方向を設定します。ガバナンスの適正化については、開催までのスケジュール予定（イベントプラン）を含む覚え書きを主管者と交わし、工程管理の実効力を確保する方策を検討します。

運営者と競技者の間に競技の公平性やその確保のための競技規則の運用について考え方に食い違いがあることが露呈した点に対して、JOA 内にアスリート委員会を設置し、継続的に競技者と運営者や組織が意見交換できる場を構築します。これによって、競技者と組織・運営の相互理解を促進し、安心してかつ気持ちよく参加できる競技運営・参加の在り方を探ります。

3. 短期的対応（～1年）

①主管者への厳重注意

②イベントプランによる工程管理

③主要役員の配置による体制づくり

④競技規則の改訂検討と規則運用指針の作成による均質化

特に、2019年4月に開催される全日本（ロング）については、以下の対応を行います。

全日本スプリントを短期間で準備した YMOE 社の貢献には謝意を表しますが、一方で、その組織風土が全日本スプリント大会での問題とその拡大に影響したと JOA では認識しています。この点について、今後の再発を防止するための厳重なる注意喚起を行うとともに、そのための方策を、協働して立案します。その際、中期的課題への対応で詳細に検討する、

大会開催までのスケジュール予定（イベントプラン）を含む、大会の内容についての覚え書きを交わすことや、工程管理の実質化を確保する方策を試行的に実行します。

JOA から主要役員である副実行委員長、運営責任者、競技責任者、コースプランナー等を配置し、準備進行管理の実質化を図り、再発リスクを下げるための JOA として主体的な関与をすでにスタートさせています。

運営者と競技者間の規則解釈の齟齬については、競技規則の改訂や競技規則運用指針の作成により、そのギャップを埋める作業を 2019 年 4 月の全日本ロングまでに進めます。

その後開催される 2019 年 10 月の全日本ロング&ミドル、11 月全日本スプリントについては、全日本ロングでの試行を踏まえて、主催大会開催におけるガバナンス方法を確立させます。

■付録：運営上の課題・問題とその時の対応についての詳細

1. スタート開始の数分前からスタートチャイマーを動かしはじめたところ、電池が消耗していることが判明し、EA が電池を買いに行く指示を出した。スタート開始時にはチャイマー音がおかしくなっており、運営者 A の手元の時計でスタートチャイマーの誤差を計測するとともに、口頭によるスタートに切り替えようとした。そこへ、予備のスタートチャイマーが届けられた。競技責任者は、3 番目スタートの選手まではタイムロスがあったと判断して、それを補正して計算するように計算センターの運営者 B に指示した。

これにより、ME 予選の最初のスタートが混乱した。4 番目スタートまでには正常に復旧したが、混乱した 3 番目までのスタート選手については、競技責任者とスタート係員が手元の時計でロスタイムを計測しており、成績を補正した。

背景として、大会当日までスタート係が決まっていなかった。急遽、運営者 C をチーフとして運営者 A と競技責任者でスタート係をすることにした。スタートチャイマーは 4 番目スタート以降では正常に作動した。

2. ME 予選で D 選手が失格となった。同選手はスタートの 1 秒前に飛び出し、そこで間違いに気づいて一旦止まったものの、その位置からスタートラインに戻ることなく競技を始めたために失格とした。時計は、スタートラインではなくスタート枠入り口付近に実際の時刻を表示したものが設置されていた。本大会ではスタートチャイマーは 3 秒前からチャイマー音が鳴り始める方式ではなく、4 秒前から鳴り始めるようにセットされていた。

同選手からは、故意ではなかった、スタートラインから現在時刻が確認できる場所に時計がなかった、国際大会では救済されるはず（タイムの加算でよいのではないか）、早いスタート時刻にスタートチャイマーが混乱していてスタート管理でできていたとはいえない、という内容の提訴があった。

しかしながら、同選手のスタート順は 30 番目で、スタートチャイマーの動作はすでに正常に戻っており、かつ前の選手のスタートの様子を知る十分な機会があった。とまどった選手は何人かいたが、明らかにフライングと判定できるスタートの仕方をしたのは同選手だけであり、またその様子が運営責任者が撮影していたビデオにも明瞭に記録されていたことから、厳格な処分をするのが適当であるという判断となった。裁定委員会もこの決定を支持した。

なお、決勝では E 選手が 1 秒前に飛び出したが、間違いに気づいてスタートラインに戻ってからスタートしていた。

選手のスタートをコントロールできる係員は、スタート直前での選手チェックの係以外にはいなかった。

3. ME/WE 予選が終わる前に途中経過や未帰還者リストまでを WEB サイトでライブ配信始めてしまったため、遅いスタート時刻の選手が事前にどちらのヒートかを知りうる状況

であった、という指摘があった。ライブ配信については、計時システムの担当者からネットに開示して良いか、という問い合わせがあり、実行委員長の回答により実施された。この間、EA、競技責任者および運営責任者に知らされず、チェックができなかった。今大会において実際に不公平が生じかどうか確認できなかったが、不適切であったと当日お詫びした。

4.今回大会ではテレインの制約があったため、人工の障害物を迷路風に走るレグを設定するというアイデアを実行委員長が考案し、競技責任者が同意した。ところが、この障害物エリアを観戦エリアから見ることができ、Eクラス予選のスタートの遅い選手に有利になるのではないかと、という指摘があった。競技責任者は、横から見た感覚と実際に走った時の感覚が異なるので、見ても結果に影響しないであろうと判断した。コントロール位置は誰でも見られるため、実際に走る様子を見ることによる有利不利についての検討が十分ではなかった。

5. E クラス決勝の終盤のコントロール設置位置に疑義が生じた。設置担当者が設置した位置を競技責任者が確認した後で、実行委員長が自身の判断で場所を数 m ほど移動した。このことは EA も承知しているが、それが競技責任者に報告されなかった。当該コントロールは遠くからも視認でき、レースに実質的な影響はなかったとして不成立とはしなかったが、なぜ疑義を生む設置となったのか？再発防止策をどうするのか？という追加の調査依頼があった。

6.表彰式で E クラスは 6 位まで表彰したが、6 位と 7 位の差は 0.2 秒 であった。WOC のスプリント競技決勝では 0.1 秒単位で計測するが、日本の規則にその規定はなく、また、0.1 秒単位で計測するための措置は実施されていなかった。表彰式に際して 7 位になった選手から 0.2 秒差で順位がつくのはおかしいのではないかと、という指摘があり、競技責任者は 6 位と 7 位は同順位であるとし、表彰のやり直しを指示した。計測の運営者 F がスプリント競技の決勝は 0.1 秒単位で計時すると思っていた。

8.広い芝生広場の中に何も特徴物が存在しなかったため、岐阜県協会の幟を立てて、人工特徴物というコントロールを作った。

この人工特徴物については、規則により内容を知らせるべきであったが、MAP、プログラム、公式掲示板のいずれでも注記されていなかった。